平成 26 年度 博士論文要旨

日本古代の祭祀と芸能

氏　名:雨宮　康弘

本論文は、日本古代における芸能の周辺環境について神祇祭祀を中心に論じるものであり、その過程を通して芸能の社会的背景や機能など、芸能の持つ歴史性を明らかにしていくことを目的とする。

序章「本稿の目的と研究の意義について」では、芸能研究の方法論、芸能史研究の整理、芸能の特質と祭祀のあり方について確認を行った。そのうえで、芸能史研究の課題として、①芸能を発生・発展・変貌させる社会的環境、②芸能を媒介として成立する社会的関係、③芸能を担い受け入れる人々とその変化、④芸能を構成する道具や装置、⑤これまでの①から④の相互関係によって形成される文化のあり方について国際的視野を通して比較検討する必要があることを論じた。

第一章「日本古代の祭祀組織 - 烟と後家を中心として」では、神社に供奉する性別や年齢の異なる人々の規定および祭祀・日常生活について、「烟」と「後家」による供奉のあり方を通して検討を行い、神宮の祭祀組織のあり方を考察した。その結果、「烟」は奉斎集団が祭祀に供奉する際の基礎的単位であり、一定期間神を祭るための集団を表す単位であること、「後家」は、奉斎集団を供出する母胎であり、奉斎集団の妻子等による集団であり、祭祀に供奉するとともに、奉斎集団が日常の生活を営む建物としてもあった。これらのことから、「烟」は奉斎集団の代表として神に供奉し、「後家」は奉斎集団の成員として祭料を供進する形態が、神宮祭祀の組織と構造であるといえることを指摘した。

第二章「日本古代祭祀における直会 - 神宮月次祭を中心として - 」では、祭祀芸能の母胎である直会の役割について、直会が重層的に執り行われる神宮祭祀、とりわけ月次祭を中心に検討を行った。その結果、直会は、祭祀における一連の流れの節目において行われる酒宴であり、祭祀に供奉した人々によって形成されるコミュニティの空間であり、社会的関係を再確認する場所であるといえる。したがって、直会を重層的に執り行うことは、直会に参加する人々の間に祭祀に対する共通の認識を形成し、祭祀の運営・維持を可能にするとともに、祭祀を通して確認される社会的関係の正統性を保証するものであることを指摘した。なお、直会が行われる場所と供奉する人々の関係を中心に論じたため、直会において用いられる直会料との関係については言及することができなかった。直会の性格を考える上で重要な要素である直会料の弁備と使用のあり方は今後の課題である。

第三章「神楽の成立と変遷 - 鎮魂祭を中心として - 」では、祭祀芸能の形成について、鎮魂祭と神楽という「祭祀」と「芸能」を中心に検討を行った。その結果、鎮魂祭の中心をなす「式次第」である「奏楽」と「鎮魂」（後に「盃事」が追加される）を神楽の原形として理解することが可能であり、神楽の構成が「神事」から「神事 - 盃事」へと移行する過程は、神楽が整備され体系化される過程であり、神楽という芸能の形成過程であると理解することができる。そのため「盃事」は「神事」を継承しながら「神事」を発展させるものであり、芸能の形成において重要な要素であることを指摘した。

第四章「日本古代芸能と御贄 - 吉野国栖を事例として - 」では、古代芸能の本質とされる御贄の祭祀における役割と芸能との連関性について、「祭祀芸能」を伝えるとされる吉野

国栖による祭祀への供奉を通して検討を行った。その結果、吉野国栖が供奉する祭祀は年間を通して執行されることから季節を象徴するものであり、季節を象徴する祭祀に奉られる御贄は「季節」を体現するものであるといえる。このように祭祀と御贄によって形成される「季節」のなかで執り行われる芸能は四季を表現するものであることから、日本古代芸能は「季節」とともにあり、また日本古代王権は芸能を通して四季を彩り象徴することにより、イデオロギー支配を可能としていたことを指摘した。なお、「季節」によって芸能に求められる役割と担い手との関係、吉野国栖に代表される芸能の担い手が中世において卑賤視されていく過程についてなどは今後の課題である。

むすびにかえてでは、以上の検討結果の整理を行い、①仏教儀礼や宮廷儀礼における芸能の役割、②祭料の弁備と使用のあり方、③直会と中世の宮座との繋がり、④雅楽及び雅楽寮の社会的位置付け、⑤楽器や楽面などの道具の流入と変遷、⑥芸能の担い手と文化の形成と変遷、などを今後の課題として提示した。